



第33回 日本神経理学療法学会サテライトカンファレンス富山

複雑化するパーキンソン病の理学療法

-私たちの挑戦-



会期 **2025年3月9日(日)**

集会長 石黒 幸治 (富山大学附属病院)

会場 富山大学五福キャンパス黒田講堂(対面)+オンライン(ZOOM ウェビナー)

主催 一般社団法人日本神経理学療法学会



複雑化するパーキンソン病の理学療法- 私たちの挑戦-

集会長 石黒 幸治

所属：富山大学附属病院

開催趣旨

「病人の生命を救い、ケガを治すことができても、治療の後に体に不自由が残るならば、医学はその責任を果たしたとは言えないのではないか（砂原茂一、リハビリテーション、岩波新書）」。40年以上前のこの言葉は、リハビリテーションの本質と課題を鋭く指摘しています。臨床経験の長短を問わず、すべての理学療法士がこの理念をどのように解釈し、日々の臨床実践に反映させているかを問い直す必要があります。

第33回日本神経理学療法学会サテライトカンファレンス富山のテーマは、「複雑化するパーキンソン病の理学療法 -私たちの挑戦-」です。パーキンソン病 (PD) は、その病態の複雑さゆえに、脳卒中以上に包括的な理解と対応が求められる疾患です。すくみや小刻み歩行などの運動症状は、認知機能低下、起立性低血圧、便秘、幻視、アパシーなど多岐にわたる非運動症状と密接に関連しており、PD の全体像を把握することは容易ではありません。さらに、ウェアリングオフや日内変動、緩徐ながらも進行性という特性を考慮すると、個々の患者に対して、どのような評価や治療・課題を、いつ、どのように実施すべきか、多くの理学療法士が試行錯誤を重ねています。

適切な評価なくしては、目標設定や介入計画の立案・実施は曖昧なものとなってしまいます。一方で、障害像を正確に把握し、エビデンスに基づいた標準的な理学療法を実施しても、予期せぬ症状変動により、期待通りの改善が得られないケースも少なくありません。このような複雑な状況下で、私たちはどのようにアプローチすべきでしょうか。

本カンファレンスでは、現行の理学療法ガイドライン第2版の現状と今後の展望を共有しつつ、前駆期を含む多面的なPDに対して、経験豊富な研究者や臨床家がどのように取り組んでいるのかを議論します。理論と臨床実践のギャップに直面した際の思考プロセスや、個別性に配慮したアプローチについて深く掘り下げ、たとえ十分なエビデンスがなくとも、全人的な視点から最適な介入方法を模索する糸口を見出したいと考えています。

各講師からは最新の知見も提供いただき、増加の一途を辿るPDに対する理学療法のあり方について、原点に立ち返りながら議論を深めます。このカンファレンスを通じて、PDの理学療法に関する多次元的な課題に対する日本全体のコンセンサスを形成し、今後の方向性を探る機会としたいと考えています。

カンファレンス日程

① オープニングリマーク（集会長講演）（10分） 9:30～9:40

テーマ：複雑化するパーキンソン病の理学療法 -私たちの挑戦-

集会長：石黒 幸治（富山大学附属病院）

② 教育講演Ⅰ（40分） 9:40～10:20

テーマ：未来の理学療法を導くガイドライン -改訂へのステップ-

講師：菊地 豊（美原記念病院）

座長：大畑 光司（北陸大学）

③ 教育講演Ⅱ（40分） 10:25～11:05

テーマ：標準的理学療法と個別的アプローチをどのように融合するか

講師：岡田 洋平（畿央大学）

座長：久保田 雅史（金沢大学）

④ 教育講演Ⅲ（40分） 11:10～11:50

テーマ：パーキンソン病患者の筋制御メカニズムの解明と応用

講師：西川 裕一（金沢大学）

座長：武村 啓住（福井大学医学部附属病院）

⑤ 症例提示Ⅰ（30分） 12:50～13:20

テーマ：予期せぬ運動症状の変動にどう対応するか -私の挑戦-

講師：三上恭平（登戸内科・脳神経クリニック）

座長：櫻井 吾郎（金沢大学附属病院）

⑥ 症例提示Ⅱ（30分） 13:25～13:55

テーマ：認知機能低下や非運動症状が運動に与える影響にどう立ち向かうか -私の挑戦-

講師：松村 真裕美（福井大学医学部附属病院）

座長：内山 圭太（金沢赤十字病院）

⑦ 症例提示Ⅲ（30分） 14:00～14:30

テーマ：社会参画を目指した多職種連携の意義とその活用法 -私の挑戦-

講師：福元 裕人（富山県リハビリテーション病院）

座長：浦野 寛太（富山大学附属病院）

⑧ 総合討議（75分） 14:35～15:50

テーマ：複雑化するパーキンソン病の理学療法- 私たちの挑戦-

講師：岡田 洋平（畿央大学）

講師：西川 裕一（金沢大学）

講師：三上 恭平（登戸内科・脳神経クリニック）

講師：松村 真裕美（福井大学医学部附属病院）

講師：福元 裕人（富山県リハビリテーション病院）

総合司会：菊地 豊（美原記念病院）・石黒幸治（富山大学）

⑦ クロージングリマーク（5分） 15:50～16:00

準備委員長：宮原 謙一郎（北陸大学）

ご参加の皆様へ（WEB 参加）

【WEB での当日参加方法】

本サテライトカンファレンスは、Zoom ウェビナーで行います。

接続用 URL、ID、パスワードはオンライン参加者にメールでお知らせします。

円滑な進行とセキュリティ確保のため以下の注意事項をご確認ください。

・事前準備について

- ① サテライトカンファレンス開催日前に Zoom アプリの最新版がインストールされていることをご確認ください。
- ② インターネット接続が安定している環境でご参加ください。
- ③ 本ウェビナーの参加用 URL や ID、パスワードは第三者と共有しないでください。

・入室について

- ① 開始 30 分前の 9 時 00 分から入室可能です。
- ② 開始 5 分前（9 時 25 分）にはご入室していただき、接続状況をご確認ください。
- ③ Zoom に参加する際は、本人確認のため、氏名入力欄に「会員番号（理学療法士以外は職種）、氏名、所属」で設定し入室ください。
- ④ 本ウェビナーの録画、スクリーンショット、録音は禁止です。

・質疑応答について

- ① 講演内容について、講演終了後に質問を受け付けます。
- ② 質問の採否は司会や座長に一任となりますのでご了承ください。
- ③ 講演内容に関するご質問は、「Q&A 機能」でコメント入力してください。

その他、開演以降のお問い合わせは、Zoom ウェビナーのチャット機能で“事務局”宛にご連絡下さい。

【通信環境】

通信環境について、インターネット接続は有線 LAN を推奨します。

無線接続（Wi-Fi など）の場合やインターネット速度が低下した環境で接続している場合、接続が不安定になり、映像や音声に影響が出る場合がございます。

通信環境不良による責任は負いかねます。

※ 開演以降の問い合わせは、Zoom ウェビナーのチャット機能で“事務局”宛にご連絡下さい。

ご参加の皆様へ（対面参加）

【会場】

富山大学 五福キャンパス 黒田講堂

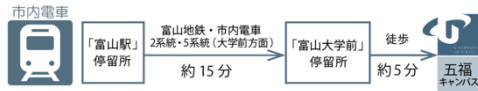
【アクセス】 <https://www.u-toyama.ac.jp/access/campus-access/gofuku/>



富山大学五福キャンパス
交通アクセス QR
〒930-8555 富山市五福 3190 番地

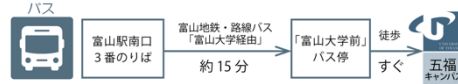
五福キャンパスへのアクセス方法

市内電車



富山駅から約20分：
「富山駅」停留所にて2系統・5系統（大学前方面）に乗車約15分→「富山駅前」停留所下車 徒歩約5分

バス



富山駅から約15分：
富山駅南口バスターミナル3番のりばにて富山地铁・路線バス「富山大学前経由」に乗車約15分→「富山駅前」バス停下車 徒歩

タクシー



富山駅から約15分
富山空港から約20分

～ご注意～

- ・駐車場の駐車台数に限りがあります。
- ・お近くの方との乗り合わせや公共交通機関等の利用に協力ください。

五福キャンパスマップ



(Google map)
周辺マップ



富山大学五福キャンパス 正門



会場 黒田

正門から入って、すぐ右手の建物です

ご参加の皆様へ（対面参加）

【受付開始時間】

8 時 45 分から開場致します。

【昼食】

大学の食堂や売店は日曜日休業のため昼食の販売はございません。最寄りのコンビニや飲食店でご購入いただくか、予め各自でご準備ください。

本会場（黒田講堂会議室）での飲食は可能ですが、ゴミは各自でお持ち帰りいただきますようお願いいたします。また本会場の向かいにある喫茶『AZAMI』は、営業はしていませんが、昼食の場としてご利用いただけます。その際もゴミは各自でお持ち帰りいただきますようお願いいたします。

【発言される皆様へ】

ご質問、ご発言される方は、あらかじめマイクスタンドの前で待機の上、座長の指示に従い、所属・氏名を述べてからご発言下さい。

【座長】

十分な座席数を確保してありますが、一部の座席は機材等を設置するため利用を制限する場合があります。運営に支障を来さないよう準備します。

【体調不良の方へ】

前日・当日発熱のある方、呼吸器症状のある方のご来場はご遠慮させていただいております。もし該当される場合は、事務局へ連絡いただければ web 参加用手続きについてお知らせ致します。

事務局：中田 健史（富山大学附属病院）

E-mail: 33sc.toyama@gmail.com

ご参加の皆様へ

【視聴に関して】

本サテライトカンファレンスはハイブリッド開催であり、WEBでのリアルタイム配信としています。

【プログラム集に関して】

本プログラム集を各自ダウンロードの上お使い下さい。
二次利用、配付は固く禁じます。

【カメラ・ビデオ撮影・録音】

本会内容のカメラ・ビデオ撮影・録音・スクリーンショットなどは講演者や発表者の著作権保護や対象者プライバシー保護のため禁止させていただきます。

【領収書】

第 33 回日本理学療法学会サテライトカンファレンス終了後、参加費が支払われており、参加確認ができた方は、領収書をマイページにて取得できます。なお、PT 協会非会員の方は、Payventにて領主書を取得できます。

【問い合わせ先】

カンファレンスに関する事項は下記までお問い合わせ下さい。

事務局：中田 健史（富山大学附属病院）

E-mail: 33sc.toyama@gmail.com

※ WEB 参加の方へ

開演以降の問い合わせは、Zoom ウェビナーのチャット機能で“事務局”宛にご連絡下さい。



教育講演 I

未来の理学療法を導くガイドライン～改定へのステップ

講師：菊地豊

所属：公益財団法人脳血管研究所美原記念病院
パーキンソン病・運動障害センター

講演概要

本邦の第2版パーキンソン病（PD）理学療法ガイドラインは刊行から4年が経過し、PD患者や理学療法士を取り巻く環境は大きく変化した。PDパンデミックと称される高齢者人口の増加に伴う患者数の急増、さらに2020年から2023年のコロナ禍を経て、生活様式が変化。加えて、新薬の開発や人工知能などの技術革新により医療技術の高度化が。このような変化の中で、理学療法は個々の患者のアウトカムを最大化するために、どのような理学療法を、どのように提供すべきか。2021年の改定時にはなかった新たな臨床疑問（クリニカルクエスチョン）が生まれている。

本講演では、国内外のガイドラインを振り返り、パーキンソン病の理学療法を取り巻く環境の変化により、どのようなクリニカルクエスチョンが生じているのかを整理する。その上で、ガイドラインが未来の理学療法をどのように導くのか、また、改定を踏まえたパーキンソン病理学療法の実践のアップデートについて考える機会としたい。

略歴等

2000年、札幌総合医療専門学校理学療法学科を卒業後、公益財団法人脳血管研究所美原記念病院に入職。2011年より神経難病リハビリテーション課課長を務め、2024年からはパーキンソン病・運動障害センターのセンター長補佐を務める。2008年に群馬大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程を修了。

研究・学術活動として、神経難病リハビリテーション研究会幹事（2011年～）、日本小脳学会理事（2021年～）、日本神経理学療法学会理事（2022年～）、同学会戦略的課題解決委員会脊髄小脳変症班などを歴任。日本理学療法士協会ガイドライン・用語策定委員会神経難病作成班（2016年～2021年）にも従事。

研究業績として、変性性小脳失調症に対する非侵襲的脳刺激の効果に関するシステムティックレビュー（2024年）などの論文を発表。著書に「Rehabilitation for Spinocerebellar Ataxia」（2021年）などがある。



教育講演Ⅱ

標準的理学療法と個別のアプローチをどのように融合するか

講師：岡田 洋平

所属：畿央大学大学院健康科学研究科

講演概要

パーキンソン病(Parkinson's disease: PD)は、多系統に疾患の影響が及ぶ緩徐進行性神経変性疾患である。そのため、PD患者は多様な運動症状および非運動症状を示し、疾患の進行とともに日常生活動作の障害が顕著となる。日常生活動作の低下に伴い活動性が減少し、二次的な機能障害の進行が加速する。抗PD薬による治療は有効であるものの、疾患の進行とともに薬効の安定性が失われ、運動症状および非運動症状の変動が顕在化する。さらに、PDのサブタイプごとに異なる経過をたどる可能性が指摘されている。このように、PDの進行に伴い、多様な要素が相互に影響し合い、日常生活の障害がより複雑化していく。

臨床においては、患者一人ひとりが異なる問題を抱えており、価値観や性格といった個人因子、家族構成や介護者の有無、居住環境といった環境因子も個々に異なる。したがって、理学療法の介入においては、PDの病態や障害の特性を正しく理解した上で、バイアスを排し、患者の残存機能も含めた障害像を的確に捉える必要がある。加えて疾患の経過に応じた多職種連携のもと、チーム全体で問題意識を共有しながら、理学療法の役割を適切に果たしていくことが求められる。

標準的理学療法の知見を活かしつつ、患者個々の特性に寄り添った柔軟な介入を行うことが、標準的理学療法と個別のアプローチの融合の鍵になると考える。

略歴等

職歴

2004年4月～2008年3月：西大和リハビリテーション病院

2008年4月～2010年3月：畿央大学健康科学部理学療法学科助手

2010年4月～2016年3月：畿央大学健康科学部理学療法学科助教

2016年4月～：畿央大学健康科学部理学療法学科准教授

最終学歴

2012年3月：大阪府立大学大学院博士後期課程修了（保健学博士）

資格・免許

理学療法士免許取得：2004年4月

MDS-UPDRS Training program & Certificate Exercise：2019年9月30日

専門理学療法士（神経）：2012年3月31日取得

パーキンソン病療養指導士：2022年6月1日取得



教育講演 III

パーキンソン病患者の筋制御メカニズムの解明と応用

講師：西川裕一

所属：金沢大学理工研究域フロンティア工学系

講演概要

近年、運動生理学・工学領域において高密度表面筋電図法を用いた非侵襲的な運動単位の解析アルゴリズムの開発が飛躍的に進んでいる。本手法は、単一筋に複数（60-120個程度）の表面電極を貼付して、筋線維上に伝搬する活動電位の波形解析を行うことで、活動電位の伝搬の起源（神経筋接合部）の同定や、運動単位の活動するタイミング（Pulse train）を同定することができる。この手法を用いることで、非侵襲的に運動単位の活動動態を定量化することが可能となり、現在は様々なパラメータ（発火頻度・発火閾値・Persistent inward currents等）に関する報告が増えてきている。しかしながら、健常者や加齢性変化に関する論文が多く、神経変性疾患などの有患者に関する報告は限られている。

我々の研究グループは、パーキンソン病(Nishikawa Y, et al. Eur J Neurosci, 2021)や筋萎縮性側索硬化症(Nishikawa Y, et al. Clin Neurophysiol, 2022)といった神経変性疾患を中心に疾患特異的な活動異常を報告してきた。パーキンソン病に関しては、軽症例において、すでに運動単位の過剰な活動が観察できること、神経変性が重度な患者ほど活動頻度が過剰であること、神経筋制御機構の非対称性は女性のほうがより顕著に生じていることなどを確認している。本教育講演では、これまでに報告してきたパーキンソン病の軽症～重症例患者の神経筋制御機構に関する知見を中心に紹介し、現在取り組んでいる介入研究についても紹介し、理学療法領域への応用可能性について議論したい。

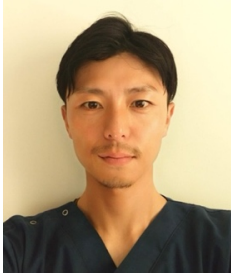
略歴等

2012年～2020年：広島大学病院診療支援部リハビリテーション部門，理学療法士

2018年：広島大学大学院医歯薬保健学研究科修了（博士：医学）

2018年～2019年：Marquette University, Visiting Research Assistant

2020年～：金沢大学理工研究域フロンティア工学系，助教



症例提示 I

予期せぬ運動症状の変動にどう対応するか—私の挑戦—

講師：三上 恭平

所属：登戸内科・脳神経クリニック

講演概要

パーキンソン病は緩徐進行性の神経変性疾患であり、疾患自体の進行により急激に運動症状が増悪するというようなことは本来ありえない。しかしながら、日々の臨床では運動症状が急激に増悪したり、行為や動作の介助量が急に増加したりするというような大きな変動をしばしば経験する。このような運動症状の急激な変動の背景には、非運動症状や生活習慣、生活環境といった運動症状以外の多要因が複合的かつ、複雑に関与していることがある。つまり、本症例提示のタイトルにある「パーキンソン病の予期せぬ運動症状の変動にどう対応するか」について臨床思考を深め、対応していくためには、患者が示す運動症状と非運動症状を **Complex symptoms** として総合的に捉える視点が重要となる。加えて、患者の生活習慣や社会的役割、環境について把握することも、理学療法士が対応する運動症状や行為、動作の障害の評価として重要となるだろう。

本集会では、患者が示す予期せぬ運動症状の変動に対応するために、その変動の背景にある要因をどのように評価し、臨床推論を進め、意思決定しながら理学療法に落とし込んでいるかについて、自験例を通じて提示したいと考えている。

略歴等

2006年 岩手リハビリテーション学院 卒業

盛岡友愛病院勤務

2012年 登戸内科・脳神経クリニック勤務

現在 同クリニック リハビリテーション科 科長



症例提示 II

認知機能低下や非運動症状が運動に与える影響 にどう立ち向かうかー私の挑戦ー

講師：松村真裕美

所属：福井大学医学部附属病院

はじめに

パーキンソン病（Parkinson's disease : PD）の非運動症状は、認知・精神障害、自律神経機能障、睡眠障害、感覚障害など多様な症状があり、前駆期を含めた罹患期間の中でみられる。非運動症状の中でも認知機能障害（遂行機能障害、注意機能障害、視空間認知障害）は、パーキンソン病症例の転倒にも影響を与える。今回、遂行機能や視空間認知の低下がみられた転倒頻回症例を報告する。

症例提示

50代半ばでPDと診断。徐々にジスキネジアが目立つようになり罹病7年目に脳深部刺激装置埋め込み術目的に当院入院。術前の状態は、運動機能は Berg Balance Scale 52点、Timed Up&Go Test 9秒/16歩、院内は杖歩行で自立。認知機能は、改訂長谷川式簡易知能評価スケール 28/30点、Frontal Assessment Battery 13/18点、Trail making test A 38秒・B 84秒、遂行機能障害症候群の行動評価総プロフィール得点 16/24点の全般的区分平均下、コース立方体組み合わせテスト 61/131点であった。自宅生活での転倒歴あり、頻度は1日1回程度で物を運ぶ時の転倒や後方への転倒が多かった。当院入院中は周術期のコンディショニングを行いながらPD症状のセルフケア指導、転倒予防指導、在宅生活で受けるリハビリテーションのサービス調整を行い自宅退院となった。術後半年後は、転倒回数は月3回程度に軽減していた。

本症例は、リハビリテーション開始当初ジスキネジアはあるものの評価テスト上の運動機能は良好であったが、頻回に転倒していた。認知および高次脳機能において遂行機能や視空間認知の低下がみられ、本症例の認知機能障害を把握した上での転倒予防指導と環境調整により転倒回数の軽減が図れた。

略歴等

平成14年：福井医科大学附属病院（現 福井大学医学部附属病院）入職
脳神経内科・脳神経外科病棟のリハビリテーションに従事
神経筋障害認定理学療法士



症例提示 III

社会参画を目指した多職種連携の意義とその活用法 -私の挑戦-

講師：福元裕人

所属：富山県リハビリテーション病院・こども支援センター

講演概要

症例はパーキンソン病を患いながら生活し、3回にわたって回復期病棟に入院された方です。社会参画と多職種連携を軸として、理学療法士としての関わりの過程を紹介します。

本症例を振り返る中で社会参画と多職種連携に関する課題を3つ挙げます。まず一つは社会参画をどのように促せば良いかです。本症例に富山県にあるパーキンソン病の会の情報提供を行いました参加には至らず、退院後に引きこもりがちな生活となっていました。二つ目は、入院中の医療職内の連携をどのように行えば良いかです。体調の把握をどのように行えば良いか、本人の意向にどう寄り添うことが良いかといった反省点が多数あります。三つ目は、医療者から本人と家族への「退院後の生活を見据えた情報提供」をどう整理して行えば良いかという点です。想定される退院後の生活を本人・家族と共有することや、介護方法を家族がどのように計画的に指導していくかといった点が重要だと感じました。

この症例提示は、こうしたら良いですよと言ったモデルケースではなく、社会参画も多職種連携も不十分であって、もっとこんなこともできたのではないか？という内省を紹介させていただく形になります。患者様にとってより良い関わりができるように、参加者の皆さんとともに熟考できれば幸いです。

略歴等

2013年：信州大学医学部保健学科理学療法学専攻 卒業

2013年：富山県リハビリテーション病院・こども支援センター 入職（現在に至る）

2018年：富山大学大学院修士課程 修了（教育学修士）

2025年：信州大学大学院博士課程 修了予定（保健学博士）

理学療法士の専門性のひとつとして、モチベーションコントロールやコーチングスキルを追求している。所属病院内では、理学療法士の教育システムや、リハビリテーションの効果検証を行うための職場内データ収集システムを構築し、運用・管理している。

準備委員会

集会長

石黒 幸治（富山大学附属病院）

準備委員長

宮原 謙一郎（北陸大学）

準備委員

中田健史（富山大学附属病院）

新出敏治（富山大学附属病院）

中田健太（富山大学附属病院）

古屋浩太（富山大学附属病院）

浦野寛太（富山大学附属病院）

運営協力者

宮地竜也（富山大学附属病院）

福田紗恵子（富山大学附属病院）

亀山結子（富山大学附属病院）

松島千太郎（富山大学附属病院）

丸山雄基（富山大学附属病院）

第 33 回日本神経理学療法学会

サテライトカンファレンス富山 抄録集

2025 年 2 月 吉日 発行

発行人：第 33 回日本神経理学療法学会サテライトカンファレンス富山

準備委員長：宮原 謙一郎（北陸大学）